

絵画修復家の アトリエから

加賀優記子 絵画修復家

24

今年の冬は例年より少し寒かったですね。これを書いている今日2月8日は、それでもはじめての春の陽気。(天気予報によると来週はまた雪模様らしいです。)

春の到来は、きつぱりくしゃみやみ一発からやってきました。私のアレルギーは結構重症で、殆ど人格破壊状態になります。思考力ゼロ、手なんかブルブル震えちゃう。今日もアトリエでメスを持ちながら何度も「はつくしよん」の連発。画面破いちやうぞー。

あー、だめだめ、うちのアトリエは今間違っても画面を破けないエライ人達でいっぱいなんだから！
と、いう事で今日の私は思考力の低下も手伝って(?!), いつもと少し趣向を

のです。でも、3月一杯でこの状態にもおさらばさ！ このコラムが刊行になる4月には私はきつと何処かゆつくりと花見旅行にでも出ているのではないかしら。(だといいなあ……)

変えて(タイトルが修復家のアトリエからって言うのだからね)、たまにはウチのアトリエの風景についても書いてみたいと思います。

現在私のところには、ものすごく立派な額縁に入ったウメバラの龍ちゃん(梅原龍三郎)が来ています。それに、昔美術の教科書に載っていたような気のあるサエキくん(佐伯祐三)も一緒。奥の方には小山君とか(小山敬三)泥酔監禁時代のユトリロさんとかが綺麗にしてもらえるのを待っている。まるで今つてパブルだったか?と勘違いするような立役者揃い。
年末からずっとこのお偉方のお客様のご接待で何処にも行けず、セコムをガンガンに入れて神経びりびりで過してきた

りません。しかし、この手にひっかかるのは悲しいかなこのごろはウチの亭主だけなので、(結婚すると、男友達が皆無くなるのだ。)

貧乏暇なしって私の事だワ、と思いながら梅原を直していると、なんとなくそんなギスギスしたような心持ちもゆつたりしてくるのです。それもそのはず、作品に使われている絵の具は純金と、なんとプラチナ! プラチナなんて使った絵は始めて見ました。梅原は政界財界に重用された画家でしたが、やっぱりこんな画材を使う事も出来たのだなあ、と思いますね……。修復では、基本的にこうした金、銀、類には補彩はしませんから、私としては「良かったあ」ってところですかね。プラチナなんて買えないもん。

額縁もすごくつて、男性4人で、やっとなり上がるしろ物です。ですから、額の修理も計画的にやらないと、ちよつとひっくり返して反対側、なんて簡単には行かない。いつもは女性2人だけで仕事をしていますので、しょうがないから男性の友人を「おごるから。」と言って何処からかたぶらかして連れてこなければなら

でも上手。額を直すのは殆ど彼女の担当です。私と違って無口だから、金箔に向いてます。私なんかやったらすぐにフワフワと箔が飛んでつちやう。おしやべりだし、花粉症だし。

昨日も私と相手の女性スタッフは日曜日に出勤して、あつち側をウチの亭主に任せて「せーのー、くくくつ!と頑張っていたのでした。(補足して状況をもう少し詳しく説明しますと、うちのアトリエには2畳程度のヤグラがあつて、こういう場合はこの中に2歳になった娘を閉じ込めています。狭くて可哀想なので、いらなくなつた屏風と絨毯をしいて(豪華でしよ)「ベビー日本間」と言う名前になつて居るのです。その、ガラス張りの向こうでアタチも持ちチュー!と騒いでいる中、我々は働いているのね。おお、チビよ、君はきつと学ぶでしょう、労働の尊さを。ママは苦勞してあんたを育てているのだよ!)

ふつと隣を見れば、来た時はお嬢様然としていた相方も、このごろはずいぶん腕つぶしが強くなりました。大丈夫かなあ、ウチなんかで働いては、嫁に行けなくなるかも。
彼女はテンペラや金箔を貼るのがとつ

屋さんの正面を描いた絵なのですが、これが私の住んでいたリヨン街の店に良く似ている。今は、綺麗な店に改装されているけど、確かに私が住んでいた1980年代はこんな感じだった。そう、この黄色い靴マークの看板。暗い赤で塗った窓枠。私はこの真上の階の部屋に住んでいたんじやあなかつたっけか。

来週から、ものすごく大きくて立派なロシアイコンがアトリエに来るので、初めて彼女一人に任せてしまおうかなって思っています。頑張れ、頑張れ。

今、同時に仕事を進めている佐伯の絵も、一筋縄では直せない(なかなか帰ってくれない)お客様です。裏に古い修復で、頑丈な格子の組まれた合天井の板がびつちりと貼つてあり、これを切り崩すのは至難の業です。この硬い板のせいで、麻布の呼吸、動きが封じられ、油彩画の表面に沢山の亀裂が出来てしまつています。すでに剥落も始まつていて、状況はすこぶる悪い。
なんと少しでも板を除去してオリジナルの布だけの状態に近づけたい。表面を沢山の表打ちで保護し、裏を慎重に慎重に彫刻刀で削る、(最後はヤスリで)気の遠くなるような作業です。そう、だからくしやみなんかしちやあいけない。
ところで、この絵は、パリの靴の修繕

屋さんの正面を描いた絵なのですが、これが私の住んでいたリヨン街の店に良く似ている。今は、綺麗な店に改装されているけど、確かに私が住んでいた1980年代はこんな感じだった。そう、この黄色い靴マークの看板。暗い赤で塗った窓枠。私はこの真上の階の部屋に住んでいたんじやあなかつたっけか。

ものすごく貧乏で、コンクリート剥き出しの床で、窓辺にやつてくる鳩に餌をやりながら。確信は持てないけど、だからこそほんのりと愛着を持つて毎日裏を削っています。あの時ただの学生だった私が、いまこんな名画を削っているなんて。
ほんとに、誰が想像できた? 面白いな、人生つて。と、ブツブツ言っている。え?何か言いました、先生、と彼女が聞いた。
「うんにや、何でも。それよりあんた、今年絶対結婚しなさいよ!。相手なんか誰だつていいじゃん!」と、かつて私

が人にしつこく言われた台詞を言つたら、彼女、私の夫をちらりと見て納得した様子でうなずいた。あつはつはー。